

『医療政策学校』No. 3 (本の泉社、2006年12月)に掲載(10-13頁)。2006年10月14日(土)18:00:脱稿・送稿。10月31日(火)校了。本文:4,052字。

社会調査との出会い

——調査入門当時の思い出——

垣田裕介

本稿は、本誌前号に収録された拙稿「社会科学的認識との出会い——学生時代の読書の思い出」の続編にあたります。そこに記したように、私は、大学4年次に大阪の釜ヶ崎(あいりん地区)を見学に訪れた経験をキッカケとして、大学院に進学して貧困問題の調査研究を行おうと決意しました。今回は、「現場・研究・自分史」の三題漸という依頼テーマに即して、私が社会調査に本格的に携わるようになってからの自分史を振り返りつつ、関連文献の読書や現場での調査に関する思い出を紹介し、そのなかで得た研究上の教訓について記すことにします。

社会調査入門

——読み返す3つの文献——

私が、日雇労働者やホームレスなどを対象とした貧困問題の勉強と調査研究に取り組み始めたのは、同志社大学での4年間の学生生活を終え、大学院進学を目指して1年間の浪人生活を送っている頃でした(正確には、大阪府立大学社会福祉学部の研究生)。この年(1998年度)は、夜中は大阪市内のホームレスの概数調査に参加し(後述)、日中は大学院入試の受験勉強に励むという忘れ難い夏を経験しました。その翌年に大阪府立大学大学院に入学しました。

私が社会調査の世界に入門するにあたって手ほど

きを受けたのは、大阪府立大学社会福祉学部(現・人間社会学部社会福祉学科)の中山徹先生です。社会調査の訓練(修業)のスタート地点にいた私は、中山先生から多くの関連文献の紹介を受けました。その中で、特に調査の方法やスタンスに関して、印象深かったとともに今でも頻りに読み返している3点を、以下に紹介します。

①氏原正治郎(1959)「編集をおわって——調査についての覚書」大河内一男・氏原正治郎・藤田若雄編『労働組合の構造と機能——職場組織の実態分析』東京大学出版会。623-639頁。

自ら「調査屋」を名乗る著者が、調査研究者の「悲しみ」や「非力」について率直に綴るとともに、「調査研究は、いかなる意味で実践に役立つか」を厳しく問うた調査論。特に終盤は印象的で、大いに共感させられます。すなわち、貧困調査に携わった者であれば誰もが、貧困者を「救済しなければならない」という義務感に駆られるとともに、調査研究者が貧困者の「救済のためにいかに無力で無責任であるか、を骨身にしみて知るのである」と。

②S. ウェッブ・B. ウェッブ著、川喜多喬訳(1982)『社会調査の方法』東京大学出版会、第2章「社会研究者の精神的資質」(31-51頁)。原著:1932年。

社会調査や社会研究に携わるうえでの「知的誠実性」に関する諸注意が喚起されています。例えば、特定の答を求めて疑問を発するといった「抗しがたい誘惑」、また、研究者にとって利害や価値観、選好などの偏向が不可避であること(「汝自身を知れ」)など。私は本章を、襟を正すために定期的に読み返しており、昨年度と今年度に勤務先の大学院で担当した講義「調査研究」の教材にも用いました。

③今野浩一郎(1989)「経験的調査管理学」下田平裕身ほか『労働調査論——フィールドから学ぶ』日本労働協会。76-91頁。

著者の経験に即して書かれた、ユニークな調査論。「調査道には難しい理屈の前に、職人的な気質と技が大切であり、それに合った研究者の気質とノウハウ

ウがある」という著者の思いが、本論のテーマとなっています。なかでも頭に残るフレーズは、「調査屋は進んで『雑用』の仕事に就け」。その理由や効用が説得的に示されており、社会調査の下積み修業を始めた頃の私にとって、たいへん役に立った（なぐさめられた）、思い出の文献です。

ホームレス調査の思い出（１） ——数を把握する難しさ——

これまで、あれこれの調査に参加しましたが、なかでも強く印象に残っているのは、1998年の夏に大阪府で実施されたホームレスの概数調査です。

この調査では、社会調査の教科書に書かれているような、調査対象の母数というものがそもそも把握されていなかったわけですから、調査チームがみずから市内のホームレスを数え回ったわけです。「寝込み」をカウントする必要があるということになり、「夜討ち朝駆け」をキーワードとして、夜間の調査実施体制を取りました。調査チームが夜通しで、公園や駅構内、河川敷を始め、市内のすべての道路（路地や通路も）を回り、崖や草むら、寺や神社の敷地内にも足を運びました。こうしてはじき出されたのが、その後よく用いられた8,660人という数字です。

しかし、この数字はあくまでも概数です。ホームレスの数をより正確に把握するうえでは、例えば次のような困難や制約をとまいません。まず、調査時に、自転車や徒歩で移動中の方もおられますので、ダブってカウントしてしまうおそれがあります。また、いうまでもなく、われわれが見落としとしてカウントから漏れている方もおられるでしょう。さらに、これは2003年に厚生労働省が発表したホームレス数に対して批判的な意見が出されたように、例えば一つのテントの中にホームレスが1人とは限りませんので、より正確にカウントしようとするれば、テントや小屋、ダンボールハウスの中を確認する必要があります。

ホームレス数の把握について、原則論的にいえば、これは2002年に大阪府で実施されたホームレス聞き取り調査で経験したことでありますが、まずは相手がホ

ームレスなのかどうか確認する必要があるということです。当たり前のことではありながら、これは相当にタイヘンな作業でした。例えば、公園や駅前のベンチで、たくさん荷物を積んだ自転車を横に停めて座っておられる方を目にして、われわれ調査員はその方に近づき、慎重にセリフを選んで声をかけ、調査に協力してもらうわけです。堺市内の大きな公園で、「わし、ホームレスちゃうわ」と、調査員が怒鳴られていたシーンを、今でもよく思い出します。

調査対象の母数や所在地を官庁統計で把握できなかったという点では、2003年に大阪市生野区で実施された在日コリアン高齢者の生活実態調査の際も同様でした。在日外国人の多くは住民基本台帳や選挙人名簿に登録されていませんので、この調査の場合も、調査対象の母数の把握やサンプル抽出などの作業が、教科書通りには進みませんでした。

ホームレスや在日外国人に限らず、調査対象の把握に苦労するというのは、他の社会福祉調査にも共通する点でしょう。

ホームレス調査の思い出（２） ——現場での対話という原点——

先にふれたホームレス概数調査のように、調査対象の数を把握するだけで、ひと夏かかることもあります。しかし、調査の醍醐味はやはり、調査対象者と顔を合わせて聞き取りをする作業にあるのでしょうか。

私にとって印象深い思い出は、公園や路上のテントに向いて聞き取りを行っている際に、ホームレスの「おっちゃん」から食事や飲みものを振舞われた経験です。それは、消費期限の切れたコンビニ弁当であったり、どこで汲んでこられたのか濁っている水であったり、いつからの飲みかけか不明な紙パックの日本酒であったり、と様々でした。本稿を読まれている方の中には、これと同じような体験や、その際に戸惑われた経験をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。

訪問聞き取り調査というのは、門前払いされる場合も少なくありません。一般的な例でいえば、調査

対象者のお宅にうかがった際に、玄関や部屋に通してもらい、そのうえに座布団やお茶まで出してもらえるとというのは、ありがたい待遇であろうと思います。

ホームレス調査の場合も同様ですが、濁った水を出された時は、さすがに動揺し、複雑な気持ちになりました。それは、1999年の夏に大阪市内で実施された調査での思い出です。公園のテントを訪問した調査員の私に対して、ホームレスの「おっちゃん」が、「暑いのに、ごくろうさんやねえ」と一杯の水を振舞ってくれたわけです。いろいろと思いをめぐらせました……まったく口を付けないでいると気を悪くされるだろう、しかし、水を出してくださった気持ちは本当にありがたい……。そこで、まずは、「いただきます」と一口飲んでみたところ、口の中には細かい砂のような感覚が……ならば一気に飲むか、いや、あまりに勢いよく飲み干すと、おかわりが出てきそう……。結局、その「おっちゃん」が出してくださった水を飲みながら、ゆっくりと話をうかがいました。それでよかったのだらうと思いますし、だからこそじっくりと話してくださったように思っています。

調査する側からすれば、聞き取りの相手から特に飲みものや食べものが出された時に、独特の緊張感を味わいます。そこでのこちらの対応が試されているような気にもなります。おそらく、そういう場合のこちらの対応によって、相手とのあいだに壁が設けられたり、あるいは逆に警戒心をほどいてくださったりと、聞き取りの場の雰囲気は左右されるように思います。

現場と研究との往復運動

現場に出向いて聞き取りなどの調査を行うというのは、あくまで研究の方法・手法の一つです。しかしながら、現場の状況に関して、自分の知りたいことがまだ調べられていなかったり、すでに発表された研究結果がどこまで説明力をもつのか疑問であったりと、そのような場合には、みずから現場に目を向けて実態を調査することが必要になると考えます。

そして、現場での調査を通して、自分自身の従来の解釈や研究結果について省みることも重要だと思います。

要するに、研究を進めていくうえで、ホントのところはどうなんだろう、と虚心坦懐に現場へ出向く姿勢が大切なのだと、私は考えます。そしてまた、現場に出向いたときこそ、やはりそのような姿勢が研究にとって大切であると、あらためて原点に引き戻されるように思います。本稿で社会調査の世界に足を踏み入れてからの自分史を振り返ってみて、これも現場と研究との往復運動なのだろうと考えるようになりました。

(かきた・ゆうすけ／大分大学・講師)